

障がい者アスリートとともに創り・学ぶアダプテッドスポーツ教育

Adapted sports education to create and learn with disability athletes

体育学部健康科学科

宮本 彩

MIYAMOTO, Aya

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

要旨：本研究は受講者の学生と講師である障がい者アスリートの双方が学びあえる教育プログラムに向け、その取り組み事例を報告するとともに、教育的な効果について検討することを目的とした。受講者は本学健康科学科2年生（66名）とし、講師にアンプティサッカー日本トップ選手（1名）を招聘した。教育プログラムとして①導入、②体験、③交流、④省察を実施し、効果検証として受講者を対象に教育プログラム前後で障がい者スポーツのイメージ等に関するアンケート調査を行った。その結果、受講者の障がい者スポーツに対するイメージが肯定的に変容することがわかった。また、講師に対して教育プログラム後にヒアリングを行った結果、改めて自分自身の障害を振り返る良い機会になったとの意見が得られた。

キーワード：教育プログラム作成、障がい者スポーツ、障害理解

I. はじめに

国は東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けてムーブメントを高め、レガシーとして残していく目的で、オリンピック・パラリンピック教育を推進してきた。高等教育機関においても推進策が明示され（オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議、2016）、各大学が工夫を凝らした学習へとつながっている。なかでも、パラリンピックを代表とする障がい者スポーツへの理解を深めようとする取り組みが精力的に進められ、インクルーシブスポーツやアダプテッドスポーツ、障害理解や共生社会をキーワードに教育ならびに研究が行われ、その効果が報告されている（曾根、2016；佐藤、2019）。本学においても障がい者スポーツを体験する機会を設け、体験を通して学生の障がい者に対する協力的意識や障がい者スポーツの実施機会の必要性に関する認識が高まる傾向にあることを報告してきた（小玉ら、2018）。

筆者自身も、正課授業外の取り組みとしてスポーツを専攻する学生を対象にアンプティサッカー競技者との交流イベントを実施し、障がい者スポーツに対するイメージの変化等から教育効果を検討してきた。その結果、参加した学生の障がい者スポーツに対するイメージが肯定的なものへと変容すること、また、ス

ポーツの価値や現在のスポーツ教育あるいはスポーツ活動の在り方を問い直す機会になることを明らかにしてきた（宮本ら、2020）。

これら先行研究では、主に受講者の意識や行動の変容から教育の効果を検証している。しかしながら、真の共生社会の実現に向けた教育プログラムと称するためには、受講生のみならず講師として伝える側に立った障がい者アスリートにも学びがなければならないと筆者は考えるが、講師の視点で評価した研究は見当たらない。

そこで、本研究は受講者の学生と講師である障がい者アスリートの双方が学びあえる教育プログラムに向け、その取り組み事例を報告するとともに、教育的な効果について検討することを目的とした。なお、本研究では障がい者スポーツを題材にアダプテッドスポーツ教育のプログラムを作成することとした。アダプテッドスポーツとは、「障害のある人がスポーツを楽しむために、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切」という概念で、その対象は、障害のある人はもちろんのこと、幼児から高齢者、体力の低い人も含まれる（矢部、2004）。つまり、アダプテッドスポーツはすべての立場の人が主体となって取り組むことができる概念であると考え、本研究におい

て選定することとした。

II. 方法

1. 対象

(1) 受講者

本研究の教育プログラムの対象者（以降、受講者とする）は、本学健康科学科2年生（66名）であった。多様性への理解をテーマに後期のキャリアディベロップメント・基礎ゼミの授業内にて教育プログラムを実施した。なお、詳細はⅢ. 結果及び考察の1. 実施した教育プログラムの報告に後述する。

(2) 講師

講師は2018年のアンブティサッカーワールドカップ・メキシコ大会に出場した日本トップ選手（1名）であった。本研究の趣旨に賛同し、本研究の教育プログラムにおける障がい者アスリートによるオンライン講演会の講師を引き受けてくださった。

講師は大学時代にバイク事故により右脚大腿部から下を切断した。切断後のリハビリテーションを経て復学を果たし、薬剤師の免許を取得され、現在、薬局を営んでいる。受講者が柔道整復師を目指す学生ということもあり、講師が薬剤師として医療の現場で活躍されていることも踏まえ、本研究の依頼を行った。

2. 教育プログラムの作成

教育プログラムの作成にあたり、受講者に協力を要請したところ、5名の学生が有志として参加を表明した。なお、有志学生のうち過去に障がい者との交流経験があった学生は1名のみであった。また、有志学生に参加の理由を尋ねたところ、「障がい者スポーツに関心があるから」が2名、「イベントの企画・運営に興味があったから」が1名、「友だちが参加するから」が2名であった。

教育プログラムは、企画会議（計3回）にて有志学生の障がい者スポーツに関する興味や関心、経験等の聞き取りを行いながら検討を行い、以下のプログラムを実施することに決定した。

- ① 導入プログラム；筆者ならびに有志学生2名による障がい者スポーツ及びアダブテッドスポーツの説明と紹介
- ② 体験プログラム；アンブティサッカーの体験
- ③ 交流プログラム；障がい者アスリートによるオンライン講演会
- ④ 省察プログラム；課題レポートの作成

交流プログラムである障がい者アスリートによるオンライン講演会に向けては、著者と講師でメールならびにビデオでのオンライン会議を重ね、プレゼンテーション内容ならびに講演会の進行方法を決定した。

3. 教育プログラムの効果検証

(1) 受講者へのアンケート調査

教育プログラムの受講者への効果検証として、障がい者スポーツのイメージ等に関するアンケート調査を教育プログラムの前（導入プログラムの冒頭）と後（交流プログラムの終了後）で実施した。なお、アンケート調査の実施にあたり、調査の概要と方法について説明を行い、同意を得たのち、一斉法により実施した。倫理的配慮として、無記名にて実施したが、教育プログラム前後の回答を対応させる目的で、学籍番号の記入の協力を求めた。また、調査の実施に先立ち、本研究への参加は自由意志であり、参加を拒否したことによって不利益を被ることがないことを口頭にて十分に説明した。その結果、教育プログラム前のアンケートへの回答者は59名、後の回答者は58名であった。また、教育プログラムの前後で対応が可能だった回答者は54名であった。

障がい者スポーツに対するイメージについては、西垣ら（2012）に従い、否定的イメージと肯定的イメージを対にした10項目の質問を教育プログラムの前後にGoogleフォームを用いて質問した。以下に10項目の設問を示す。

- ①大勢で楽しめない—大勢でも楽しめる
- ②技術向上は望めない—技術向上もある
- ③見てもつまらなさそう—おもしろそう
- ④スポーツを行う意味がない—とても意味がある
- ⑤スポーツを行うのは危ない—危なくはない
- ⑥できることが限られてしまう—工夫をすればいろいろできる
- ⑦スポーツをするのは難しいこと—簡単なこと
- ⑧スポーツをやるべきではない—積極的にやるべき
- ⑨スポーツをする環境が作れない—環境を作ることができる
- ⑩健常者が一緒にやるものではない—一緒にできると思う

否定的なイメージを「1」とし、肯定的なイメージを「5」として、考えに最も近い番号に○をつけるように指示した。

教育プログラム前のアンケートでは、「あなたは障がい者スポーツを体験したことがありますか？」とい

う設問に対しては「1. ある」と「2. ない」の二者択一とし、「1. ある」と回答した者に対して体験した種目の自由記述を求めた。また、「あなたは初級障がい者スポーツ指導員の資格を希望していますか?」という設問に対して「1. 希望しており、授業を履修した」、「2. 希望しているが、まだ授業は履修していない」、「3. 現在検討中である」、「4. 希望していない」の選択肢から、単一回答法により回答を得た。

教育プログラム後のアンケートでは、「今後、障がい者スポーツのイベントがあったら参加してみたいですか?」という設問に対して、「1. ぜひ参加したい」、「2. 都合が合えば参加したい」、「3. あまり参加したくない」、「4. 参加したくない」、「5. わからない」の選択肢から、単一回答法により回答を得た。

アンケート調査は、質問項目ごとに単純集計を行い、回答者数とその割合を求めた。また、初級障がい者スポーツ指導員取得に向けた授業を履修したか否かにより群分けを行い、二元配置分散分析により群ごとの教育プログラム前後での調査結果の比較を行った。

(2) 講師へのヒアリング

教育プログラムに参加した講師への効果検証として、電話によるヒアリングを講演会後に実施した。ヒアリングでは、講演会の感想やプレゼンテーションに込めた想い、講演会の講師を経たことによる障害に対する考えの変化、今後の教育プログラムへの提案などに関する聞き取りを行った。

Ⅲ. 結果および考察

1. 実施した教育プログラムの報告

(1) 導入プログラム

導入プログラムとして90分の講義を行った。講義の主な目的は、受講者に障がい者スポーツの多様性を伝えることであった。著者による障がい者スポーツの三大大会（パラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックス）の紹介とアダプテッドスポーツの概念の説明を行ったのち、有志学生2名によるプレゼンテーション（各20分）を実施した。有志学生によるプレゼンテーションでは、障がい者サッカー7種目を例に、障害区分があることや障害に合わせたルールや用具の工夫の紹介が行われた。

(2) 体験プログラム

体験プログラムとして180分の実技授業を行った。実技種目は、交流プログラムの講師がアンプティサッカー選手ということもあり、アンプティサッカーを

行った。

アンプティサッカーとは、上肢あるいは下肢に切断や麻痺などの障害のある人のために設計されたアダプテッドスポーツの1つである。試合は1チーム7人制で、ピッチサイズは11人制サッカーの約3分の2の広さ（国際基準60m×40m）で行われる。ゴールキーパーは上肢に障害のある競技者が、フィールドプレイヤーは下肢に障害のある競技者が担当する。フィールドプレイヤーが義足を着用せず、ロフストランドクラッチを用いてプレーを行うことが競技の特徴の1つといえる（日本アンプティサッカー協会HP）。

体験プログラムでは、受講者にロフストランドクラッチを用いた片脚でのプレーに挑戦してもらった。ロフストランドクラッチ（以降、クラッチという）とは、医療・リハビリテーションや日常生活においてよく使用されている医療用補助器具の1つで、体重を支える握り部分に加え、前腕を支えるカフ（腕支え）が備わった杖のことである。柔道整復師の過去の国家試験において用具の特徴に関する出題がなされていることから、詳細な説明を実施した後に、以下に示す順で進行した。

- ①アンプティサッカーの基本ルールの説明
- ②クラッチを用いた基本的な動き方（歩く、走る、ターン、ボール操作）の指導
- ③クラッチを用いた基本的な動き（歩く、走る、ターン、ボール操作）の実践
- ④チーム分け及び対抗戦のルール説明
- ⑤チームごとの練習及び戦術相談
- ⑥3チーム総当たりによる対抗戦

今回、ほとんどの受講者が初めてアンプティサッカーを体験することから、対抗戦はアンプティサッカーのルールに準拠しつつ、独自のルールを設定することとした。まずは、チームの人数は受講者数を鑑みて11人制（フィールドプレイヤー10人、ゴールキーパー1人）とした。また、フィールドプレイヤーのうち5人のみがクラッチを使用してプレーすることとした。なお、クラッチを使用しているプレイヤーのみシュートを可能にするルールを付加した。ゴールキーパーについては片腕のみでプレーすることとした。アンプティサッカーではゴールキーパーのプレー範囲がペナルティーエリア内のみと限定されているが、今回の対抗戦ではこのルールを適用しないこととした。

体験プログラム開始時はクラッチの使い方や身体の動かし方に苦慮していた受講生たちも、時間が経つにつれて上達し、チームでのプレーを楽しんでいる様子

であった。健常者サッカー以上にチームメイトの状況に気を配り、助け合いながらプレーすることに、新たな楽しみを見出したと語る受講生もいた。

(3) 交流プログラム

交流プログラムとして90分の障がい者アスリートによる講演会を行った。新型コロナウイルス感染拡大のため、今回はオンラインで実施することとなった。講演会は大きく3つのパートに分かれており、パートごとに質疑応答の時間を設け、受講者との交流を行った。

1つ目のパートは、①切断の経緯、②障害を負ってから現在に至るまでの歩み、③薬剤師としての現在のお仕事の様子についての話であった。入院中や退院後の心情など、障害を受け入れていくまでの様々な葛藤について語られた。また、辛い経験だけでなく、充実した大学生活の話や薬剤師としてのキャリアの話を伺うことができた。質疑応答では、受講者から障害を乗り越えて進んでこられた心の強さについて問われ、目の前にある課題をクリアし、目標を達成することに注力してきた結果だと思ふとの回答がなされた。

2つ目のパートは、アンプティサッカーとの出会いから日本代表選手としての戦いについての話であった。また、1つ目と2つ目のパートのまとめとして、受講生に向けて「やりたいと思えば、何でも出来る。やる前から諦めず、トライしてほしい。いろいろなチャレンジをして、視野を広げよう。チャレンジしないことには失敗もしないし、例え失敗しても、みんなは何も失っていない」との想いが伝えられた。質疑応答では、受講者から「アンプティサッカーを体験してみたらターンなど身体の使い方が難しかったが、どのようにして技術を習得しているのか」との質問がなされ、講師からクラッチワークなどアンプティサッカーの技術の奥深さについての話がなされた。

3つ目のパートは、障がい者であり、医療人でもある立場から、真の障害理解に向けた話をしていただいた。このパートでは、受講者が義足に触れる機会を設け、義足の構造や義足ユーザー特有の身体の負担について説明がなされた。そして最後に講師から「障がい者=患者ではない」との考えが伝えられ、「ある一面だけで物事を判断せず、多面的に見てほしい」との話がなされた。

(4) 省察プログラム

省察プログラムとして、受講者に手書きでの課題レポートの作成を課した。課題は、振り返りだけでなく、受講生の行動や実践につながるきっかけとなるよ

う、以下の3つの項目を設定した。

①体験会や講演会の前と後で障がい者スポーツやアスリートへのイメージは変わりましたか？体験会や講演会の感想を含めて、自分なりの障がい者スポーツやアスリートのサポートのあり方について気づいた点や今後に活かしたい点などについて書いてください。

②真の多様性理解として、自分自身が今後どのようなことができるか（しようと思うか）について考え、その内容を具体的に書いてください。

③あなたが大学中に挑戦したいことについて書いてください。

課題レポートの記述内容の質的分析は他稿に譲ることとし、本稿では文字数の報告を行う。項目①に対する文字数は平均295.1字（標準偏差72.6字）、項目②は平均139.7字（標準偏差53.2字）、項目③は平均94.8字（標準偏差57.0字）であった。

2. 受講者への教育効果の検証

教育プログラム前のアンケートにおいて、障がい者スポーツの体験経験を聞いたところ、「ある」と回答した人は29名（53.7%）であった。競技種目については、ポッチャが15名、アンプティサッカーが7名、車椅子バスケットが2名、フライングディスクが2名、ブラインドサッカーが2名であった。なお、複数の種目を体験した経験のある学生が3名いた。次に「初級障がい者スポーツ指導員の資格を希望していますか？」という設問に対して「希望しており、授業を履修した」と回答した人は18名（33.3%）、「希望しているが、まだ授業は履修していない」が3名（5.6%）、「現在検討中である」が4名（7.4%）、「希望していない」が29名（53.7%）であった。受講生のうち約半数はこれまでに障がい者スポーツの体験や授業の履修経験を有していた。

障がい者スポーツに対するイメージについて、教育プログラム前後のスコアを表1に示した。教育プログラム前のアンケートにおいて、受講生全体の平均点が最も高く、受講生が肯定的なイメージを持っていた項目は「④スポーツを行う意味がない—とても意味がある」で4.6 ± 0.6点であった。一方、否定的なイメージを持っていた項目は「⑦スポーツをするのは難しいこと—簡単なこと」で2.9 ± 1.2点であった。この結果は、スポーツを専攻する学生を対象に行った調査（宮本ら、2020）と類似するものであった。また、教育プログラム前後で平均点を比べてみると、10項目

表1 障がい者スポーツへのイメージについての教育プログラム前後のアンケート結果

| | 全体 (n=54) | | 授業を履修した群 (n=18) | | 授業を履修していない群 (n=36) | | ANOVA |
|---|-----------|-----------|-----------------|-----------|--------------------|-----------|-------|
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | |
| ① | 4.3 ± 0.8 | 4.7 ± 0.6 | 4.7 ± 0.6 | 4.8 ± 0.5 | 4.1 ± 0.8 | 4.6 ± 0.7 | * † |
| ② | 4.5 ± 0.7 | 4.8 ± 0.4 | 4.8 ± 0.4 | 4.9 ± 0.2 | 4.3 ± 0.7 | 4.8 ± 0.4 | * † |
| ③ | 4.3 ± 0.8 | 4.7 ± 0.5 | 4.6 ± 0.7 | 4.7 ± 0.6 | 4.1 ± 0.9 | 4.7 ± 0.5 | * |
| ④ | 4.6 ± 0.6 | 4.9 ± 0.4 | 4.7 ± 0.5 | 4.8 ± 0.4 | 4.5 ± 0.7 | 4.9 ± 0.3 | * † |
| ⑤ | 3.4 ± 0.9 | 3.6 ± 0.9 | 3.6 ± 0.8 | 3.6 ± 0.9 | 3.3 ± 0.9 | 3.6 ± 0.9 | |
| ⑥ | 4.2 ± 0.9 | 4.6 ± 0.5 | 4.7 ± 0.5 | 4.7 ± 0.5 | 3.9 ± 1.0 | 4.6 ± 0.5 | * † |
| ⑦ | 2.9 ± 1.2 | 3.2 ± 1.1 | 3.1 ± 1.1 | 3.4 ± 1.1 | 2.8 ± 1.2 | 3.1 ± 1.1 | |
| ⑧ | 4.4 ± 0.7 | 4.6 ± 0.6 | 4.4 ± 0.8 | 4.6 ± 0.6 | 4.4 ± 0.6 | 4.6 ± 0.5 | |
| ⑨ | 4.1 ± 0.9 | 4.4 ± 0.8 | 4.2 ± 0.9 | 4.3 ± 0.8 | 4.0 ± 0.9 | 4.4 ± 0.8 | |
| ⑩ | 4.4 ± 0.7 | 4.6 ± 0.7 | 4.7 ± 0.5 | 4.8 ± 0.4 | 4.3 ± 0.8 | 4.6 ± 0.7 | † |

* : 教育プログラム前と後での有意差あり (p<0.05)

† : 初級障がい者スポーツ指導員取得に向けた授業を履修した群と履修していない群の交互作用あり (p<0.05)

表内の数値は平均点±標準偏差を示している。

全てで教育プログラム前よりも後で高値を示した。特に初級障がい者スポーツ指導員取得に向けた授業を履修していない群の平均点の上昇が大きかった。さらに、二元配置分散分析の結果をみると、「①大勢でも楽しめる」、「②技術向上もある」、「③見ていておもしろそう」、「④スポーツを行う意味がある」、「⑥工夫をすればいろいろできる」の5項目で教育プログラム前後に有意な差が認められた。そのうち、「③見ていておもしろそう」を除く4項目で交互作用が認められ、初級障がい者スポーツ指導員取得に向けた授業を履修したか否かによってイメージの変容に違いが認められた。この相違は、授業を履修した群の障がい者スポーツに対するイメージが教育プログラム前から高かったことが挙げられる。なかでも「⑥工夫をすればいろいろできる」は、教育プログラム前で群間の平均点の差が最も大きく、授業を履修していない群で前後で平均点が最も上昇した。一方、「③見ていておもしろそう」については、交互作用が認められなかったことから、受講者全体で肯定的なイメージへと変容があったといえる。

教育プログラム後のアンケートにおいて、今後の障がい者スポーツへの参加意向を尋ねたところ、「ぜひ参加したい」が16名 (29.6%)、「都合が合えば参加したい」が37名 (68.5%)、「あまり参加したくない」が1名 (1.9%)、「参加したくない」は0名であった。受講者の高い意欲や意識を実際の行動へとつなげてもらうためにも、学生が参加できる障がい者スポーツのイベントへの声かけなどの継続した取り組みの実施が求

められるといえるだろう。

3. 講師への効果の検討

本研究においてオンライン講演会の講師を務めた障がい者アスリートにヒアリングを実施したところ、改めて自分自身の障害を振り返る良い機会になったとの意見が得られた。また、本研究の依頼を引き受けてくださった経緯については、障がい者としての社会的役割を担っていく、あるいは、自分にしかできないことの一つとして、今回のような講演活動があると考えたとのことであった。ただし、全ての障がい者がそのような考えを持つべきということではないこと、また、自分自身も障害を受け止めて語るに至るまでには長い時間がかかったことを理解してほしいことが付け加えられた。このことから、講師を依頼し、障害について語っていただく際には、十分な配慮と相談が必要であることが改めて明らかとなった。また、受講者側も講師のさまざまな葛藤や強い想いに応える準備をして講演会に臨む必要があるといえる。そのためには、受講者の学びの意欲を喚起する仕掛けも含めて教育プログラムを作成する必要があるといえる。

プレゼンテーションの作成にあたっては、さまざまな視点から経験談などを語るができるだけに、具体的なテーマ設定を講演会等の企画者から提示された方が助かるとの意見が得られた。本研究では著者と講師でメールならびにビデオでのオンライン会議を重ね、プレゼンテーション内容ならびに講演会の進行方法を決定した。この事前のやり取りが、伝えたいこと

を整理する上で大切な過程だったとの評価が講師から得られた。また、普段の受講者の学びとの関連性を持たせる意味でも、講師との事前打ち合わせは重要なプロセスといえる。

講演会内のプレゼンテーションに込めた想いについても聞き取りを行った。今回、「障がい者≠患者」という言葉が受講者に大きなインパクトを残したことから、講師がこの言葉に込めた想いについて伺った。その結果、受講者がこれまで無意識に抱いていた障がい者に対するイメージや考えを変える言葉を残したいと思ひ、「障がい者≠患者」というシンプルな言葉を示すことにしたとのことであった。また、たくさん伝えたいことはあるが、受講者の立場で考えると多くの言葉を持ち帰れるわけではないと考え、シンプルでありながらインパクトのある言葉を考えたとのことであった。さらに、最近では障害も個性だと思える世の中になってきたと実感することが多く、学生たちにもそのように捉えてほしいとのことであった。

オンライン講演会ということで、学生のリアクションを感じ取れない中でのプレゼンテーションだったこともあり、ヒアリングも含めて事後のやり取りを設けた点も講師から高く評価された。講師にとっては、受講者からの感想のフィードバックだけでなく、企画者とのやり取りを行うことで得られるものがあることがわかった。

IV. おわりに

本稿は受講者の学生と講師である障がい者アスリートの双方が学びあえる教育プログラムに向けた取り組みを事例として報告するとともに、教育的な効果についての検討を行ってきた。大学教育における「障害理解教育」では、障害に関する「知見」を提示するだけでなく、障がい者との「かかわり」の中で考えるプロセスが必要であることが指摘されている（中村, 2011）。今回は障がい者との「かかわり」がオンライン講演会となってしまう、直接的な「かかわり」が十分でなかった面もあるが、受講者と講師の両者が講演会に向けて事前の取り組みを積み重ねたことで、互いの理解を深めることができたと考えている。さらなる教育プログラムの発展と教育効果の向上をめざし、詳細な内容の分析を行っていききたい。

引用文献

1) 小玉京士朗, 早田剛, 清水健太, 降屋丞, 桂秀

樹, 古山喜一, 河合洋二郎: ブラインドサッカーによる学生の意識変化に関する研究. 環太平洋大学研究紀要, 12, p.113-118, 2018.

- 2) 宮本彩, 元嶋菜美香, 神野周太郎, 熊谷賢哉, 田井健太郎, 宮良俊行: スポーツを専攻する学生へのアダプテッド・スポーツ教育に向けた取り組み～アンプティサッカー・トップアスリートから学ぶ～, 長崎国際大学教育基盤センター紀要, 第1巻, p. 81-89, 2020.
- 3) 中村義之: 障害理解の視点―「知見」と「かかわり」から―, 佛教大学教育学部学会紀要, 第10号, p. 1-10, 2011.
- 4) 日本アンプティサッカー協会ホームページ. <http://j-afa.jp/>
- 5) 西垣景太, 上田ゆみ子, 藤丸郁代, 伊藤守弘: 障がい者スポーツイベントの学生への教育的効果―障害者に対するイメージの変化及びコミュニケーション能力への影響―, 中部大学教育研究, No.12, p. 55-58, 2012.
- 6) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議: オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告, 2016.
- 7) 佐藤紀子: 「アダプテッド・スポーツ」を用いた大学体育授業が初年次学生のライフスキルおよび自己肯定感に与える影響. 総合文化研究, 第24巻第1. 2. 3号合併号, p.195-219, 2019.
- 8) 曽根裕二: アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響. 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要, 第13巻, p. 53-62, 2016.
- 9) 矢部京之介: 序論 アダプテッド・スポーツとは何か, アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～, 市村出版, p. 3, 2004.

付記

本研究は2020年度環太平洋大学学内個人研究費「障がい者アスリートとともに学ぶアダプテッドスポーツ教育プログラムの構築」によって実施した。